一般社団法人 こどもとねっと

誰にでも、必要なつながりがあり
ありのままを認められる暮らしの中で
一人ひとりが、誰かのためや、社会に対して
役割を持てる社会にしたい

～こども宅食から始める「地域資源」×「行政」×「専門機関」による子育て支援事業～

非専門職と専門職がそれぞれが持てる力を発揮し合い、
心配なこどもや家庭とつながり、社会や支援につなげる事業

こども宅食を始めたきっかけ
３年前、こども宅食応援団から20万円の支援を受けて、スクールソーシャルワーカーの渡辺さんと二人で、基山町の15件に宅食をしたのがきっかけ。
２ヶ月だけの予定だったが、現在も継続中

なんで続けているのか？→こども宅食をきっかけに2つの疑問が湧いたから

１つ目の疑問：こどもや家庭はどうなるんだろう？
訪問すると
家の中がとても散らかってたり、目がうつろなこどもが出てきたり、、、

２つ目の疑問：支援する専門機関が足りていない？
渡辺さんと一緒にいると、ずっと電話が鳴りっぱなし。１日の平均の電話の件数は50件。多い日には100件！　スケジュール帳はいつもぎっしり！
「とにかくつなぎ先を見つけて、案件をさばくので精一杯」。
「つなぎ先も全然足りない、、、、」
「一旦解決してもフォローしきれず、虐待が再発する、、、」

「渡辺さんのような専門機関の人をだれが支えるのだろう？」

子どもや子育てに関わる活動を行う中で出てきた2つの問い

1. **子育て支援を行う行政や専門機関が役割を果たすことができる　地域をどうやって作るのか？**
2. **業務に忙殺される専門機関を誰がどうやって支えるのか？**

- かつて子育ては、血縁、地縁、学校などの支援を得ながら相互扶助でなされてきた。現代では、そのシステムが脆弱になり「経済的困窮」「学校からの離脱」「孤立」など課題は複雑に絡み合い、**支援が必要な子育て世帯や子どもが増加し続けている**　。
- それらの問題に対応すべく「困難を抱える子育て世帯や、子ども」を支援する制度が整えられ、その制度の下で働く専門機関や専門家は増えている。
- 一方で、対応すべき支援対象者の増加と、個別の問題が深刻化して対応の難易度が増す中で、**行政や専門機関が対応しきれない案件も増えている。**
- 支援に注力するために専門機関を支援するような仕組みが必要だが、新たに予算を増やすことは難しく、地方では専門的なスキルを持った人材が不足しており、**地域の専門機関は支援の無い中で孤軍奮闘せざるをえなくなっている**　。

増え続ける支援対象者の対応に、地域の専門機関は忙殺されている

佐賀県内の子育て支援関係機関へのヒアリング結果

スクール ソーシャル ワーカー

１日の平均の電話の件数は50件。多い日には100件近くの相談を受けている。学校へ会議、要対協の会議などの合間に、必要があれば子どもたちの家庭を訪問する。スケジュール帳はいつもぎっしり予定が埋まっている。**「とにかくつなぎ先を見つけて、案件をさばくので精一杯」。**

保健師

特定妊婦など気になる家庭には、お米などを持ってアウトリーチを行っている。福祉課や教育委員会との連携はない。自身の業務範囲を超えて縁がきれたあとは**「とても心配だが、どうしようもない」**とのこと

児童家庭支援センター

児相や佐賀市からの要請で、多くの支援をおこなっている。昨年は3500件の相談をうけている。今年度は一時保護（虐待など）とショートステイ（レスパイトなどの支援）の受け入れを毎月のべ200件（人日）以上の子どもを預かっており、受け入れを断るケースが増えているとのこと。

地域の専門機関が忙殺される根底には、3つの問題がある

問題1　専門機関では、つながったり、支援を始めることが難しい家庭がある

- 孤立している家庭(特に行政拒否ケース)につながれない
- 支援対象者が支援が必要な自覚がないなど、課題を認識していなかったり、ヤングケアラーがいる場合などは、現状の変化を求めないご家庭がある

問題2　課題を抱えている子育て家庭の数が多すぎる

- 有給職員だけでは、対応しきれない
- 支援対象者との関係を作るまでに時間がかかる
- 対応しても、その後フォローできず、虐待などが再発する

問題3　単一の専門機関だけで課題を解決するには難易度が高すぎる

- 複雑に絡み合っている課題を単一の専門スキルだけでは解決しない
- 支援対象者への支援だけでなく、支援者の外側の環境を整えるための余裕や資源がない
- 子育てを地域で包括的に支援するような仕組みを作るために社会資源の開拓や、団体同士をコーディネートする 人材がいない

鳥栖･基山の支援が必要な子育て世帯と子ども

鳥栖市・基山町で、何らかの形で支援が必要なのは約600世帯。しかし、そういった家庭に支援を届けられる専門機関の数は少なく、エリア内をカバーするのは難しい

人口　**91,000**人（出生数 854)

子育て世帯　**9,000**世帯（子ども15,000人)

- 自ら助けてと声を上げるのが難しく孤立していてアウトリーチが必要な家庭

（推計）**290**世帯

- ちょっとしたきっかけで孤立や困窮状態になる可能性のある家庭

（推計）**600**世帯

- 不登校の子ども

約 **250**人

スクールソーシャルワーカーは3人
基山･鳥栖以外の上峰町、みやき町、吉野ヶ里も担当
佐賀市には、県内唯一の児家センがありショートステイは2000人日実施
⇔鳥栖市は38人日（1/55）

3つの問題を以下の5つの事業を実施することで解決することを目指す

問題 その1

専門機関では、つながったり、
支援を始めることが難しい家庭がある

問題 その2

困難を抱えている
子育て家庭の数が多すぎる

問題 その3

単一の専門機関だけで課題を
解決するには難易度が高すぎる

A−①
アウトリーチをきっかけに孤立している家庭を見つけて、関係を作り、専門機関につなげる

A-②
専門機関と連携して見守りが必要な家庭に、非専門職が、アウトリーチを行いつながり続ける

B
専門機関の補完として機能する
「保護者の相談支援」を行う民間団体を増やす

C
教育委員会や学校と連携して、不登校の子どもの居場所を増やす

D
「行政」×「専門機関」×「地域資源」の
チームビルディングをコーディネートし、バックアップする

E
活動をする団体の組織基盤を整備する

短期アウトカム）地域資源（非専門職の市民）を開拓して、行政や専門機関（支援者）を支援する
最終アウトカム）支援者を支援することで、支援が必要な子育て世帯や子どもへの支援を増やし厚くする

活動	アウトカム（中間、支援者の変化や状態）	アウトカム（最終、家庭の変化や状態）
A-① アウトリーチをきっかけに孤立している家庭を見つけて、関係を作り、専門機関につなげる	専門機関が、最も支援を届けることが難しい孤立している家庭とつながることができたり、課題を解決できたりするようになる	虐待だったり、ヤングケアラーだったり保護者が障壁になって支援が届かなかった子どもの権利が守られる
A-② 専門機関と連携して見守りが必要な家庭に、非専門職が、アウトリーチを行いつながり続ける	相談や、継続的な寄り添いなどを非専門職が専門職に代わって担うことで、専門機関の負荷が削減される。	専門機関が関わるひとつの家庭にかける時間が増えて、支援が厚くなったり、支援を届ける家庭の数が増えたりする。そのことによって課題を解決できる家庭が増える。
B 専門機関の補完として機能する「保護者の相談支援」を行う民間団体を増やす	多くの人が関わることで、孤立感や孤独感が軽減し、虐待の再発が減るなどすることで、専門機関の対応するケースが減る。	
C 教育委員会や学校と連携して不登校の子どもの居場所を増やす	不登校の子どもが、早い段階で非専門職が、関わることで、引きこもることには至らず、専門機関の関与が必要なくなる	引きこもるなどして、社会との関係がなくなり、長期的な課題を抱えてしまう若者が減り、不登校になっても社会の中で役割を持って生きていける若者が増える
D 「行政」×「専門機関」×「地域資源」のチームビルディングをコーディネートし、バックアップする	専門機関どうしや、専門機関と社会資源が連携することで、難しい課題が解決できたり、対応できる支援対象者の数が増える。	子育て家庭が、必要なときに必要な支援を受けることができる。
E 実行団体の組織基盤を整備する	社会資源の基盤が整備される、支援する人や物資などのリソースが充実することで、専門機関が支援している家庭をつなげる先が増える。	地域資源が充実することで、子育て家庭同士の相互扶助や、子ども同士が学び合う機会が増える

休眠預金等活用事業（2023年緊急枠）で、こどもとねっとでやったこと
～こども宅食から始める「地域資源」×「行政」×「専門機関」による子育て支援事業～

B 相談支援

フードパントリー4団体
「いろり」「グッドネイバーJAPAN」「ベネッセの会」「ここてらす」が運営

D チーム作りのコーディネートとバックアップ

一社）こどもとねっとがR6年度休眠コロナ枠で実施中

E 組織基盤強化

- 食材の拠点が東部に
- 佐賀銀行と遺贈(地域での資金循環)

アウトリーチ

A 118件のアウトリーチを毎月実施（社協とも連携）

C 居場所
託児・レスパイト

学習支援 2団体
・私と僕の夢
・クローバーの会

こども食堂4団体

専門機関
基山町こども家庭センター
スクールソーシャルワーカー
鳥栖・基山町教育委員会

非専門職(実行団体)
一社）こどもとねっと

A 見守りの依頼

A
- 発見した家庭をつなぐ
- 家庭の様子を報告

出典：こども宅食応援団

事業対象

1 **孤立している家庭→行政がつながるのが困難**

例）虐待やヤングケアラーなどがきっかけで、行政拒否になっているケース

→アウトリーチが必要

2 **だれかとつながっているが支援が足りない**

例）知的障害や精神疾患があり一つの家庭だけでは養育が困難な家庭

→つながり続け、見守りながらの伴走支援が必要

3 **なんとか頑張っていて支援を受けていない家庭**

例）ひとり親家庭で、仕事も子育ても頑張っているが、毎日の生活でいっぱいいっぱい

→ 気軽に相談できたり、託児やレスパイトされる機会や居場所が必要

こども宅食から始める「地域資源」×「行政」×「専門機関」による子育て支援事業

対象とする3種類の家庭に対して、**3つの事業** でアプローチする

A	こども宅食による アウトリーチ **130世帯**	月に1度、食材を持って家庭に訪問。 変化を求めないチア（一方的な応援を届ける）	スクールソーシャルワーカー、社協、行政、児童養護施設、児童相談所
B	相談機能付き フードパントリー **100世帯**	定期的に、だれかと何気ない会話ができる。 気軽に相談できたり、レスパイトされる機会の提供	居場所運営団体、臨床心理士、 食品メーカー、生産農家
C	不登校の子どもの 居場所と 学習機会の提供 **15人（＆保護者）**	基山：体を動かす機会 鳥栖：学校の中のフリースクール	教育委員会、学習支援団体、小学校、スクールソーシャルワーカー

鳥栖・基山エリアの
民間（地域資源）・行政・専門機関の
混成チーム で実行する

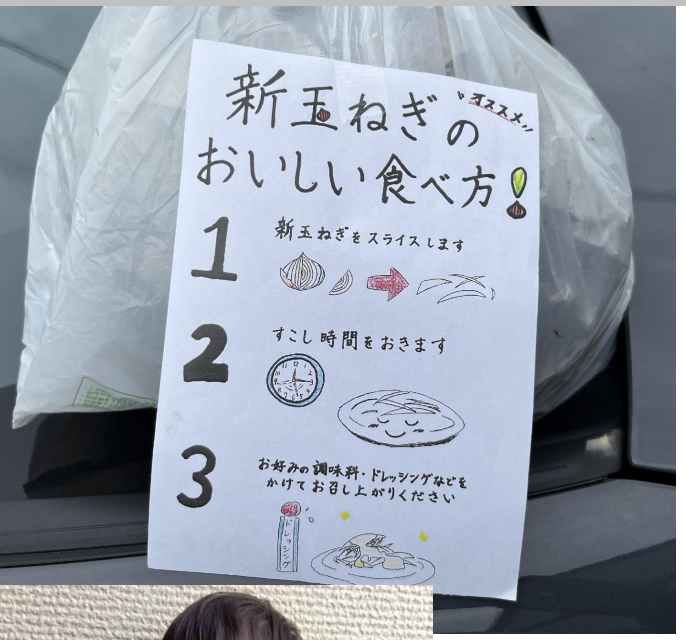
～こども宅食から始める「地域資源」×「行政」×「専門機関」による子育て支援事業～
非専門職と専門職がそれぞれが持てる力を発揮し合い、
心配なこどもや家庭とつながり、社会や支援につなげる事業

アウトプット		対象	活動内容	連携
A	こども宅食による アウトリーチ	1. 行政の支援が届かない「孤立」している家庭 2. 養育力の低い家庭	月に1度、食材を持って家庭に訪問。変化を求めないチア（一方的な応援）を届ける	スクールソーシャルワーカー、社協、行政
B	相談機能付き フードパントリー	ぎりぎりで頑張っているひとり親のご家庭	定期的に、だれかと何気ない会話ができる。必要があれば相談できる機会の提供	居場所運営団体
C	不登校の子どもの居場所と学習機会の提供	1. 不登校の子どもたち 2. その保護者	基山：体を動かす機会 鳥栖：学校の中のフリースクール	教育委員会、 学習支援団体 小学校
D	「行政」×「専門機関」×「地域資源」 のチームを作る	鳥栖・基山エリア全体	ネットワーク会議	児相、児家セン、行政、教育委員会、児童養護施設

～こども宅食から始める「地域資源」×「行政」×「専門機関」による子育て支援事業～
非専門職と専門職がそれぞれが持てる力を発揮し合い、
心配なこどもや家庭とつながり、社会や支援につなげる事業

アウトプット		対象	活動内容	連携
A	こども宅食による アウトリーチ	118世帯に毎月、こども宅食をきっかけにした アウトリーチ (つながり・つなげる)を行った		○
B	相談機能付き フードパントリー	ぎりぎりで頑張っているひとり親のご家庭	定期的に、だれかと何気ない会話ができる。必要があれば相談できる機会の提供	居場所運営団体
C	不登校の子どもの居場所と学習機会の提供	1. 不登校の子どもたち 2. その保護者	基山：体を動かす機会 鳥栖：学校の中のフリースクール	教育委員会、 学習支援団体 小学校
D	「行政」×「専門機関」×「地域資源」 のチームを作る	鳥栖・基山エリア全体	ネットワーク会議	児相、児家セン、行政、教育委員会、児童養護施設

毎月1回（必要があれば数回）
5千円程度の食材などを自宅にお届け。変化を求めず応援を届ける



鳥栖・基山の宅食対象家庭の内訳

こども宅食対象家庭（118件）		
基山町：16世帯 鳥栖市：94世帯		割合
家庭の状況	ひとり親	75%
	貧困	100%
保護者要因	虐待リスク	23%
	DV	15%
	ヤングケアラー	12%
	保護者の疾患	32%
子ども要因	不登校	56%
	こどもに障がいがある	56%

ボランティアの協力で、人件費はほぼゼロ

役割	所属	人数	
配達	SSW	2	渡辺さん、於保さん
	鳥栖市議会議員	2	永江さん、牧瀬さん
	洗心寮(児童養護施設)	2	小川さん、松尾さん
	保健師	1	
	訪問看護	1	田中さん
	中学校職員	1	久保さん
	NPOなど	3	渡辺さん、入江さん(24才)
	キリスト協会	2	野中牧師、あもんさん
	西九州大学	1	矢ヶ部先生＋ゼミ生
	臨床心理士	1	鎌田さん
	合計	16	
仕分け	社会福祉協議会 （引きこもり対策事業）	5	
	引きこもりの家族の会	20	
	有志ボランティア	15	
	合計	40	

子ども宅食は、「食支援」だけでなく
つながりを作り、気持の変化のきっかけを届ける伴走型支援

1. 「食」の支援で、生活（気持ち）が少しだけ楽になる
2. 支援者が変化を求めることなく、定期的に尋ねることで、双方向のやりとりができる関係性が生まれ「孤立」と「孤独」が和らぐ
   →虐待の再発が減少
3. 宅食以外の支援が受けたいという「思考」や「認知的」変化を生み出す。
   →行動の変化が始まる

出典：こども宅食応援団

～こども宅食から始める「地域資源」×「行政」×「専門機関」による子育て支援事業～
非専門職と専門職がそれぞれが持てる力を発揮し合い、
心配なこどもや家庭とつながり、社会や支援につなげる事業

アウトプット		対象	活動内容	連携
A	こども宅食による アウトリーチ	118世帯に毎月、こども宅食をきっかけにした アウトリーチ (つながり・つなげる)を行った		○
B	相談機能付き フードパントリー	92世帯に毎月、フードパントリーを実施 相談支援とレスパイトの機会を届けた		○
C	不登校の子どもの居場所 と学習機会の提供	1. 不登校の子どもたち 2. その保護者	基山：体を動かす機会 鳥栖：学校の中のフリースクール	教育委員会、 学習支援団体 小学校
D	「行政」×「専門機関」× 「地域資源」 のチームを作る	鳥栖・基山エリア全体	ネットワーク会議	児相、児家セン、行政、教育委員会、 児童養護施設

専門機関の補完として機能する「保護者の相談支援」を行う民間団体を増やす（相談できるパントリー）

受援力がたかまっていくのを実感

～こども宅食から始める「地域資源」×「行政」×「専門機関」による子育て支援事業～
非専門職と専門職がそれぞれが持てる力を発揮し合い、
心配なこどもや家庭とつながり、社会や支援につなげる事業

アウトプット		対象	活動内容	連携
A	こども宅食による アウトリーチ	118世帯に毎月、こども宅食をきっかけにした アウトリーチ (つながり・つなげる)を行った		○
B	相談機能付き フードパントリー	92世帯に毎月、フードパントリーを実施 相談支援とレスパイトの機会を届けた		○
C	不登校の子どもの居場所 と学習機会の提供	•基山：教育支援センターと連携して毎週開催 •鳥栖：校内 FSを3小学校スタートできが、学校の自主運営に		△
D	「行政」×「専門機関」× 「地域資源」 のチームを作る	鳥栖・基山エリア全体	ネットワーク会議	児相、児家セン、行政、教育委員会、児童養護施設

～こども宅食から始める「地域資源」×「行政」×「専門機関」による子育て支援事業～
非専門職と専門職がそれぞれが持てる力を発揮し合い、
心配なこどもや家庭とつながり、社会や支援につなげる事業

アウトプット		対象	活動内容	連携
A	こども宅食による アウトリーチ	118世帯に毎月、こども宅食をきっかけにした アウトリーチ (つながり・つなげる)を行った		○
B	相談機能付き フードパントリー	92世帯に毎月、フードパントリーを実施 相談支援とレスパイトの機会を届けた		○
C	不登校の子どもの居場所 と学習機会の提供	•基山：教育支援センターと連携して毎週開催 •鳥栖：校内 FSを3小学校スタートできが、学校の自主運営に		△
D	「行政」×「専門機関」× 「地域資源」 のチームを作る	• 連携する子育て支援の団体が10団体に •「こどもと一緒に条例作ろうぜ！」というチームができた →共通のアジェンダになるかも？		○

社会的養育の推進を図ることを目的にしたチーム
キーワードは「こどもの人権」

嬉しかったこと

1. 孤立していたご家庭がみつかり・つながり・動き出した
   ～非専門職×専門職～

2. 支援を受けていたお母さんが、支援者になった
   ～受援力が高まることで変わること～

3. 地域が動き出した
   ～社会モデルの可能性～

2024年度コロナ緊急枠でこどもとねっとでやったこと
～こども宅食から始める「地域資源」×「行政」×「専門機関」による子育て支援事業～

B 相談支援

フードパントリー4団体
「いろり」「グッドネイバーJAPAN」「ベネッセの会」「ここてらす」が運営

アウトリーチ

A 118件のアウトリーチを毎月実施（社協とも連携）

D チーム作りのコーディネートとバックアップ

一社）こどもとねっとがR6年度休眠コロナ枠で実施中

E 組織基盤強化

- 食材の拠点が東部に
- 佐賀銀行と遺贈(地域での資金循環)

C 居場所
託児・レスパイト

学習支援 2団体
・私と僕の夢
・クローバーの会

こども食堂4団体

専門機関
基山町こども家庭センター
スクールソーシャルワーカー
基山町教育委員会

非専門職(実行団体)
一社）こどもとねっと

福祉・医療モデル
（個人の変容）

社会モデル
（地域の変容）

出典：こども宅食応援団

鳥栖・基山町の現状

		概要	連携団体	
A アウトリーチ		鳥栖市：102世帯 基山町：16世帯	一社）ここてらす（こども第三の居場所）	
B 相談支援		フードパントリー2箇所 86世帯	ベネッセの会 いろり	
C 居場所		学習支援：2団体 こども食堂：4団体	■食堂　ここてらす（週3日）、サラン(食堂週1) ■学習支援　わたぼく（週5)、クローバー(3小学校)	
D 地域資源の発掘とチーム作り		・議員中心に条例を作るチームが始動 ・食材の鳥栖拠点始動		
E ファンドレイジング ※組織基盤整備		専門職	市民やボランティア	
	ヒト	■SSW2人　■議員3人　■牧師 ■洗心寮職員　■里親(Sさん) ■CAP ■訪問看護　■計画相談　■放デイ	■ひとり親の会　■こども食堂 議員中心に鳥栖市のこどもの権利条例を作る動き	
	モノ	■食材（石井食品、OKファーム、アイリス、旭食品）		
	カネ	助成金・制度（ロビー活動）	寄付	事業
		■備蓄米3団体（9t） ■休眠預金1000万円	佐賀銀行と遺贈について相談	駄菓子屋（こっぷの家）

ご清聴ありがとうございました